



沙世子の遊び唄

6月1日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

6月1日のおはなし「沙世子の遊び唄」

ほろほろほろと、鳥の啼く。

歌う声が聞こえてくるので君は隣の部屋をそっと覗く。襖の隙間から明かりが見えて、目を近づけるとまぶしくて最初は何も見えない。けれど、やがて目がなじんで来るとそこには沙世子がいて、紙風船を放り上げながらたどたどしい口調で歌っている。

向かい満月、笹の風。

君がそっと声を上げると沙世子はぱっと顔を明るくして立ち上がり、襖を開けてくれる。どうぞと言うのを聞いて君はそろりと沙世子の八畳間に入り込む。部屋の中央に置いた座布団に戻る沙世子に従い、正座して座る沙世子の右脚に身を寄せ君はうずくまる。沙世子が君の背を撫でるしぐさをし、君は身体をふっくらとさせて満足そうに唸る。

騎乗の侍、柿食わず。

沙世子はまた紙風船を投げ上げて、どこで覚えたのか遊び唄らしきものを口ずさむ。けれどそれは出来合いの詞ではないことに君は気づく。庭に向けて開け放たれた障子の縁の先に、ほろほろと啼く鳥がいる。繁る竹藪の向こうにはぽっかりと満月が浮かんでいる。騎乗の侍はというと、たったいま君が通ってきた襖に描かれている襖絵だ。

香るすだちや、三味の音（しゃみのね）や。

沙世子をうつけと呼ぶ者がうつけだ。君は思う。なるほど沙世子は同い年の少女達ができるようなことができない。読み書きも算盤も裁縫や料理もよくしない。けれどこうして目や耳に触れるものを歌にできる。なにより君を見ることができ、他の誰にも見ることができない君を。

姉も覚えぬ、影の猫。

君がまだ生きていた時、沙世子は君の尻尾で遊ぶのが好きだった。君の尻尾にそっと触れる。触れたのが分かったら君は払いのけるように尻尾を振る。そんな君に気づかれないように、気づかれないように尻尾を押さえようというのが沙世子の遊びだ。それに飽きると君の肢先をそっと手に包み込み肉球の触感を味わった。そんな時、君は沙世子と心が通う気がした。

尻尾と肉球、いまいづこ。

君はそっと立ち上がり、沙世子の手のひらに肢先を重ねる。沙世子は微笑み君を撫でようとする。君は顔を上げ沙世子をじっと見つめる。ねえ沙世子、そろそろ引け時だ。もうここに来ることはないだろう。君はそう念じて声を上げる。沙世子は微笑みを顔に漂わせたあと、君の肢先を包み込むようにした手を握り拳にし、さっきの詞をまた歌う。

尻尾と肉球、いまいづこ。

さようなら。沙世子。

(「尻尾と肉球」 ordered by akikumi-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

新作スタート。お題募集中。

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」
をご活用ください。

沙世子の遊び唄

<http://p.booklog.jp/book/38319>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38319>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/38319>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.